

関東大震災から 100 年 —大磯町外の記録から見る大磯の被害—

はじめに

関東大震災が起きた大正 12 年(1923)頃の大磯は、明治 30 年代に著名な政財界人が別荘を構えたことによって別荘地として知られ、夏は海水浴場が賑わい、町外から多くの人が訪れる地域となっていました。そのため、大磯に関わる史料は町外にも多く残されており、近年はそのような史料が発見されつつあります。関東大震災に関しても、町外に残された史料が多々あります。ここでは、それらの史料を紹介し、大磯の関東大震災の被害について考えます。

大磯における関東大震災の被害

関東大震災というと、多くの方は、東京や横浜の大火を伴った、甚大な被害のことを思い浮かべるかもしれませんが、しかし、この災害をもたらした巨大地震は、相模湾を縦断し、国府津・神縄断層に連なる相模トラフを震源とした海溝型地震であり、横浜のみならず神奈川県下に大きな被害をもたらしました。つまり、現在の大磯町域は震源に近く、火災は発生しませんでした、多くの建物が倒壊するなど、その影響は大きかったと言えます。

大磯が受けた被害を列記すると次のようになります。

- ・建物の倒壊（圧死等の人的被害）
- ・地盤の隆起
- ・高麗山ふもとの列車転覆

被害の詳細については、既に平成 24 年度企画展図録『大磯の災害』や郷土資料館ウェブサイト＞展示＞企画展示＞ミニ企画展のポスター＞大磯の災害等で紹介していますので、ぜひ、それらをご参照ください。

高麗山ふもとの列車転覆事故

さて、被害の概要として列記した一つ、高麗山ふ

もとの列車転覆事故は、関東大震災の被害の中でも大きなインパクトを残したため、町外に様々な史料が残されています。

まず、この事故の概要をまとめると、上りの第 74 列車が大磯平塚間を走行中に地震に遭遇し、機関車及び前部寄りの客車 3 両が転覆、5 両目が 4 両目の車両に突入、6 両目が脱線、大破して、乗客 8 人が死亡、職員も含めた 45 人が重軽傷を負いました。ちなみに、この列車は機関車に客車 12 両を連結した編成で、7 両目より後部は脱線、転覆しませんでした（『国有鉄道震災誌』、『大正十二年関東大地震震害調査報告』）。

この事故車両を撮影した写真や、車両を描いたスケッチが、今でも多く確認されています。



列車転覆の現場（『震災記録』より）



大磯平塚間：稲田に首を突込んだ一列車
（相葉春江画「関東大震災画」1923 年
＜横浜開港資料館所蔵＞より）

事故車両の片付けは、9 月 28 日に命令が出され、藤沢辻堂間の転覆機関車を引き起こしていた作業員が出張し、工事を担当することとなります。つまり、

震災後約1か月間、事故車両はそのままになっており、残された写真やスケッチは、その1か月間に撮影されたり、その様子を描いたりしたものと考えられます。

掲載した写真は、大磯警察署の記録に掲載されているものですが、その他にも雑誌の関東大震災特集号や、震災の被害を調査した報告書などに、同様の写真が掲載され、それらを詳細に検証すれば、事故直後なのか、車両を撤去する直前なのか、その様子がわかるかもしれません。

掲載したスケッチを描いた相葉春江については、詳細がわかっていませんが、横浜方面に居住していた人物であったようです。震災後、被害の状況を確認して、その様子を絵に描き、後世に伝えてくれました。

また、この列車転覆事故について、大正12年9月5日に発行された「静岡民友新聞」に記事があることがわかりました。記事の見出しは、「列車の窓から脱出 勇敢なる少年老婆を抱いて転覆の刹那危うく遁れて帰る」。記事によると、静岡市出身で東京の一橋高等小学校に通学していた15歳の少年が、夏休みが終わり、通学のために上京しようと実家の静岡を出発したところ、転覆した第74列車に乗り合わせ、大きな揺れが起こって列車が停車した時、咄嗟にしがみついていた隣の高齢女性と共に、列車の窓から飛び降り、九死に一生を得たということです。

第74列車の乗客は約600人と言われ、その時居合わせた人は、その人それぞれの体験を持ったことでしょう。「静岡民友新聞」の記事はその一端を伝えるものであり、今後どこかで体験者の証言を得ることがあるかもしれません。

フェリス和英女学校生徒の体験

横浜の山手にあるフェリス和英女学校（現フェリス女学院）は、関東大震災の時、校舎が倒壊し、地震後に発生した火事で焼失するという甚大な被害を受けました。当時、同校に在籍していた国語教師の寺田醇造は、生徒が体験した関東大震災の事柄を、震災の同年から翌年にかけて生徒に作文として書か

せ、昭和7年（1932）9月1日に「大震災災遭難実記」と題してまとめました。この作文集の中に、大磯で震災を体験した生徒の作文が残されています。

この生徒は、作文を書いた当時、本科6年に在籍していました。当時のフェリス和英女学校の課程は、予科1年、本科5年となっており、本科6年とは予科1年を含めて6年とした表記であると考えられ、17～18歳が就学していました。

地震が発生した9月1日は、秋の学期の始業が9月10日からであったため休暇中であり、生徒は大磯にいる姉の家で過ごしていました。そのため、大磯で被災することになります。

午後から横浜の家に帰るつもりだった生徒は、地震が発生した11時58分は姉の家の2階で、新聞を読んでいました。地震が発生すると、ガラス戸のガラスが割れ、襖が倒れ、大変だと感じた瞬間、生徒の肩に梁が落ちてきてしまいます。

身動きができなくなった生徒は死を感じましたが、姉が生徒を発見し、兄や従兄弟、遊びに来ていた大工たちに助けられ、九死に一生を得ました。助け出された生徒は、その後、姉たちと共に線路に避難。避難中も地震を感じます。

不安ながらも身の安全を確保した生徒が次に心配したことは、横浜の自宅のことでした。日が落ち、辺りが暗くなってくると、山影の空が赤く見えます。避難している大磯の人々は赤色の空を見て、横浜が火事だと言いました。生徒が横浜の自宅に帰ったのは、震災から20日目の日であり、人の話と新聞よりもはるかにひどい有り様に、啞然としたと記しています。

この生徒が記した作文の中に、すぐそばの立派な別荘の人が3人つぶされて、その1人は死んでしまったという記述があります。この生徒の姉の家が大磯のどこにあったか、詳細はわかっていませんが、線路に避難していることなどから、大磯の海側ではなく線路の近くにあった可能性があります。大磯ならではの別荘の被害については、まとまった資料がありませんが、当時の雑誌記事などから被害を受けた別荘をまとめると、次の表のようになります。

表

所有者	場所	備考
三井高棟	国府本郷及び西小磯	現県立大磯城山公園
梨本宮家	西小磯	
李王家	西小磯	滄浪閣（元伊藤博文邸）
鍋島直映	西小磯	死者2
古河虎之助	東小磯	
加藤高明	東小磯	
高田愼三	茶屋町	震災当時故人
岩崎家	南本町	現聖ステパノ学園、エリザベス・サンダース・ホーム
片岡恒太郎	大磯駅北側	死者2（片岡夫妻）
加藤正義	大磯駅北側	負傷1
酒井忠亮	大磯駅北側	
中橋徳五郎	神明町	
高木兼寛	神明町	
安田善次郎	山王町	
中島久万吉	山王町	

雑誌の記事には、著名人が所有する別荘のことしか書かれていないようで、町に残された記録には表に掲載した別荘の他にも、別荘の被害が記され、死者も記録されています。しかし、鉄道線路の近くという作文の記述から推測すると、作文に書かれている別荘は、大磯駅の北側にあった片岡恒太郎の別荘を指す可能性があります。

片岡の別荘は、かつて招仙閣という旅館があった付近にあり、同じく招仙閣の跡を別荘とした加藤正義の別荘も被害を受け、本人が負傷しました。大磯駅付近は、冒頭写真にもある通り駅舎が全壊し、駅構内や駅官舎で3人が亡くなっています。改めて、大磯駅周辺の被害が甚大であったことがわかります。

フェリス和英女学校の生徒の作文からは、大磯の被害に関する情報がわかるほか、作文を執筆した生徒のように、たまたま町外から大磯を訪れていて、大磯で被災した人々の存在をうかがい知ることができます。大磯警察署が著した『震災記録』によると、そのような別荘滞在者の、特に女性の帰京について、対応が必要であったことがわかります。

前項で述べたように、地震後は、列車が転覆し、相模川に架かる馬入鉄橋が崩壊したため、鉄道輸送は寸断されていました。そのため、避暑を大磯で過ごした別荘所有者は、東京へ戻ることができなくなってしまいました。大磯警察署の『震災記録』によると、9月11日に駆逐艦「羽風」が大磯港に入港したため、急遽交渉し、東京へ帰ることを希望する者を調査して、岩崎男爵（岩崎久弥）を含む123名が

「羽風」に乗艦して帰京しました。

同日、平塚二宮間の列車が開通しましたが、茅ヶ崎品川間の終列車との連絡がなく、9月13日には、平塚、大磯、二宮で、列車の利用客が滞留するという新たな問題が発生します。このように、9月中は列車の運行が混乱状態にあり、女性が安全に自宅へ帰れる状況ではありませんでした。そこで、9月18日、大磯警察署は茅ヶ崎駅長に交渉し、茅ヶ崎駅を朝一番に発車する列車（午前4時59分発）に限り、20人程度で混雑しないよう乗車できるように便宜を図りました。作文を書いたフェリス和英女学校の生徒は、地震発生から20日目に横浜の自宅へ帰ったと記しているため、もしかしたらこのような列車を利用したのかもしれませんが。

寺坂で起きた出来事

関東大震災が発生した大正12年当時は、現在の大磯町は、大磯町と国府村という、別の町村に分かれていました。現在の大磯町国府地区は国府村であったため、行政の記録の残り方に差異があり、国府地区の被害実態は大磯地区ほどははっきりわかりません。しかし、家屋の全半潰率は、大磯地区の26%と比べて国府地区は83%と、被害が甚大であったことは一目瞭然です。多くの家屋が倒壊した中、今回、国府村の寺坂で起きたある出来事について、知見を得ることができました。ここに、その出来事を紹介します。

国府村寺坂は、現在の大磯町寺坂にあたる地域で、江戸時代は寺坂村という一つの村であり、現在も当時の集落の様子がうかがえる地域です。この地域出身の野地芳男氏から、関東大震災の時に寺坂で起こったある出来事を教えていただきました。

野地氏の母・ミネは、田島村（現小田原市田島）の出身で、地震の当日は実家の田島村から嫁ぎ先の寺坂へ向かい、寺坂の家で被災しました。当時、ミネは出産したばかりで、田島村の実家で出産した後、生後7日の長男と、母（野地氏の祖母）・ハルと3人で9月1日早朝に田島村を出発し、11時30分頃に寺坂の家へ到着したそうです。当時は、田島村か

ら鉄道が走る国府津駅まで徒歩で向かい、国府津駅から二宮駅までは車で移動、二宮駅から寺坂まで線路伝いに歩くという、その行程は半日がかりでした。

寺坂に到着し、長男を奥部屋へ寝かせ、昼食の準備に取り掛かり、釜戸に火を入れたところ、突然、家が揺れだしました。ミネは釜戸の火消しに急ぎ、居間にいたハルは奥部屋に寝かせている赤子を助けに急いだそうです。その瞬間、家が潰れ、ハルと赤子の長男は亡くなりました。ミネは負傷したものの、潰れた家から救出され、一命を取り留めました。

当時、同じ寺坂にいた人の証言が、『むかしがたり—古老が語る大磯の災害—』に収録されています。その証言によると証言者の夫は、地震がおさまった後、ノコギリを持って出て行き、近所で家屋の下敷きになっていた人を、ノコギリで材を切ることによって助けたそうです。この証言者の夫は、下敷きになっている人を2人助けました。野地氏の母・ミネは、もしかしたらこのような近所の人に、救出されたのかもしれない。

ミネは後年、息子の野地氏に、「安全第一、地震が来たら竹藪に逃げろ、家の傍や塀のあるところには近づくな」と教えたそうです。亡くなったハルは、数日後、田島村の人々の手によって戸板に乘せられて運ばれ、田島村へ帰りました。



現在の寺坂地区(平成27年撮影)

おわりに

関東大震災が発生してから100年が経過し、社会

は大きく変わりました。単に地震の被害を学ぶだけでは、もしかしたら現在の生活からは実感が湧かないかもしれません。しかし、東日本大震災等、その後も大きな災害を経験してきた私たちは、今現在、関東大震災のような災害が起きた時、どのような事が起こるか、想像することができるでしょう。

一つ、大磯という地域を見ても、本稿で紹介したように町内外の人々が関わる、様々な出来事があったことがわかります。そして、その出来事は100年が経過した今でも、色あせることなく私たちに新たな教訓を伝えてくれます。関東大震災は、遠い過去の出来事ではないのかもしれない。

参考史料

- ・「静岡民友新聞」(静岡県歴史文化情報センター提供)
- ・旧大磯町行政資料(大磯町立図書館所蔵)

参考文献

- ・『アサヒグラフ特別号 大震災全記』東京朝日新聞社グラフ局、1923年
- ・『関東大震災写真帖』日本聯合通信社出版部、1923年
- ・『大正大震災誌』報知新聞編輯局、1923年
- ・高橋栄吉『震災記録』大磯警察署、1924年
- ・鉄道省編『国有鉄道震災誌』1927年
- ・土木学会編『大正十二年関東大地震震害調査報告』第二巻、1927年
- ・大磯町郷土資料館編『むかしがたり—古老が語る大磯の災害—』1993年
- ・大磯町編『大磯町史』3資料編近現代(1)、1998年
- ・大磯町編『大磯町史』7通史編近現代、2008年
- ・フェリス女学院150年史編纂委員会編『関東大震災女学生の記録 大震火災遭難実記』フェリス女学院、2010年
- ・大磯町郷土資料館編『大磯の災害』2013年
- ・富田三紗子「招仙閣とその跡地について」(『年報—平成29年度—』大磯町郷土資料館、2019年)
- ・野地芳男「記録と伝承 関東大震災から100年 大震災・天災に備えて」2023年

(当館学芸員／富田三紗子)